

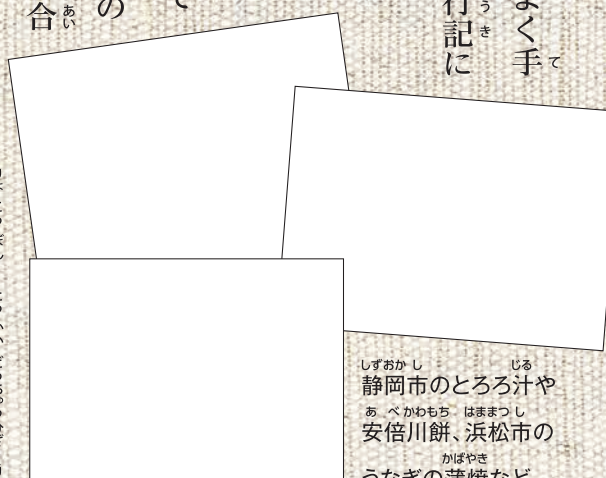
# 旅ブーム生んだ家康の道

徳川家康は全国の主な道路の基礎を造りました。家康の死後、1635年から始まった参勤交代により、大名は主要な道を通じて1年おきに江戸と地元を

行き来しました。途中で泊まる宿場を中心に町が発展し、道や施設が整い、人々が安心して行き交うことができるようになりました。「カピタン」と呼ばれる長崎のオランダ商館長ら外国から

来た人々も、道路がよく手入れされていると旅行記に書いています。大名や商人、お金の余裕がある人などに限られていた旅行で

したが、庶民も年貢の取り立てや農作業の合間を縫ってお金をためて、伊勢や富士山などへ出掛けました。寺社のお参りが目的でしたが、静岡市の安倍川餅やとろろ汁、浜松



各地の名物は旅ブームなどと同時に全国に広がった

のうなぎの蒲焼など各地の名物・名産も楽しみの一つでした。

1802年、静岡市生まれの作家十返舎九

道中膝栗毛発端 (早稲田大学図書館蔵)

の旅行本「東海道中膝栗毛」が出版されました。主人公の弥次郎兵衛(弥次さん)と喜多八(喜多さん)は、静岡市の鞠子(現在の丸子)のとろろ汁の店に入ったところ、店主夫婦がけんかを始め、とろろ汁ですべるのを見て大笑い。こんな話に庶民の旅へのあこがれが強まり、旅ブームとなりました。ガイドブックや各地の風景を描いた浮世絵も数多く出され、道を通じて文化や情報が広がっていききました。